

ぜんまい仕掛けの個性

でちん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私の個性はぜんまい仕掛けだった。

ヒロアカにSCP-914の力持った人間突っ込んだだけのクソみてーな小説。

SCP-914の能力持った知的生命体とか絶対やばいよなって発想から生まれた。

SCP Foundationはクリエイティブ・コモンズ表示―継承3.0ライセンス作品です (CC-BY-SA 3.0)

<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/deed.ja>

SCP | 914

<http://scpp.wiki.net/scpp/914>

著者：Dr Gears

実験記録著者：Dr Gearsらの合作

目次

C r o s s T e s t	ぜんまい仕掛けの個性
1	1
10	1

ぜんまい仕掛けの個性

■ ■ ■ 一家惨殺事件。

今から10年も前に起こった事件だ。この事件は世間を多いに震撼させた。何故なら5歳の男の子を残し、一家惨殺された上に駆けつけた警官とヒーロー15名が死亡、重傷者は20以上にも及ぶ大事件だったのだから。

惨殺現場はリビングでどの死体も実に惨いものであった。

男の子の母親である女性は目も当てられないくらい酷く惨たらしい、ところどころ熱線で切り取られたと思われるバラバラ死体に成り果てており、祖父は内蔵、骨、臓器などが丁寧に損傷なく切り取られたバラバラ死体、祖母に至ってはもはや辺りに散つていた血液から予測するしかない程にグチャグチャの死体へとなっていた。

———そして父親は化け物となっていたのだ。本来頭蓋骨で守られているはずの脳みそは剥き出しになり、右腕は肉と骨で造られたような脈動する鋭い刃物へと変わり、左腕は歪に膨れ上がったかのように巨大化しており、生理的嫌悪を催すかのような姿勢をしていた。その父親であった存在は常に泣き叫び、殺してくれ、殺してくれと絶叫

していた。

最初に駆けつけた8名のうち4名の警察官が取り抑えようとしたところ、近づいてきた警察官を頭頂から股下にかけて両断し、続く2名の警察官の首を跳ね飛ばした。残る警察官は個性を使用しようとしたところ、歪な左腕によって顔を掴まれ、コンクリートの地面へと叩きつけられ、頭部を粉碎され死亡。

それに気づいた残る警察官がヒーローと増援を要請。その後応戦を開始した。

ヒーローと増援が駆けつけた時に見たものはズタズタに切り裂かれた警官とくずくずに腐敗した警官、上半身が無くなっていた警官、そして首を飛ばされ四肢が切り落とされていた警官の姿であった。

すぐさまヒーローと警察官が鎮圧を開始したが、その間にも父親であった化け物の変形は進み、心臓が表皮に露出し、全身の筋肉が異常な速度で膨張を始めた。

声なき絶叫を上げ、襲いかかる対象にヒーローと警察官は勇敢に戦い、そしてその尊い犠牲の元、対象を完全に無力化することに成功した。

この事件にはオールマイトも対処しており、最後にはオールマイトによる強烈な殴打によって鎮圧することが出来た。

だが、鎮圧が成功した途端対象は青い灰へと変貌し、その粉が目に入った一部のヒーロー及び警察官は失明した。

その後家に入突した時に惨状を確認した。その時押し入れの中から5歳の男の子が心神喪失状態にて発見された。この事件唯一の生存者と言っていいだろう。

また、この事件は不可解なところがあった。それは化け物と化した父親の事だ。この者の個性は改造。無機物を常識の範囲内で改造できるといったものであった。だが、実際にはまるで複数の個性を有しているかのようであり、個性届に書かれていたものとは全く関係の無いものであった。

そして、一家の惨殺死体もまた奇妙と言える。特に母親と祖父が顕著である。母親は惨たらしくバラバラにされている所までいいが、熱線により焼き切られている部分も見え、祖父の方は医学的に意味のある切られ方をされていたのである。どちらも対象の様子からは出来そうにはない。つまりは何者かがこの事件に深く関与している可能性が高いとして見ているが、今も尚証拠を見つけることはできなかった。

余談だがこの時オールマイトは「オールフォーワンめ……！」と言い、強く拳を握り締めていた姿を一部の者が視認したという。

そして今現在も度々惨殺死体が発見される。が、どれも犯罪行為を行っていたものであった。犯人の行方を追っているが、依然として足取りを掴むことは出来ていない。

■□?? ■□?? ■□?? ■□?? ■□?? ■□?? ■□?? ■□??

「うおおおおつ!!」

こちらに向かつて殴りかかってくるヴィランに対して、軽く触れる。

「Rough」

たったその一言だけでヴィランはズタズタの惨殺死体へと変貌する。何人殺しただろうか、辺りは血の海に染まっていた。残りは一人、ここ最近世間を騒がせていたヴィラン集団だ。コイツらを殺せば善良な一般市民は安心して日常を過ごせるだろうか。そんな事を考えながら残る一人へと歩み寄っていく。

「ひつ、何なんだよお前ツ！ 俺達が何をしたって言うんだ!? お前には何もしてないだろうがアツ!!」

恐慌状態に陥っているようで、歯をガタガタと鳴らし尻餅をついたまま後退りをする。

「そうだな、お前らは私には何もしていない。けれど、お前らは悪だ。であるならば私は殺す。人を救うために」

「イカレ野郎がア！ 何なんだてめえの個性は!!? 俺の仲間達をまるで10年前の■■■■

■ 一家惨殺事件みたいに殺しやがって!」
その一言で忌々しいことを思い出した。幸福で満ちていた時期であり、そして惨劇が

起きる日のことだった。

あれはいつだったか、私は両親にヒーローになりたいと言ったことがある。母はニコニコと微笑んでいた。父は強くならなると言っていた。幸せだった、はずだ。

——■■■■一家惨殺事件が起きるまでは。

あの事件が起きてからヒーローや警察はよく親身に接してくれるようになった。凄惨な現場を見てしまったから心が壊れてしまったのだろうと言って、必ず犯人を見つけ出してみせるからと言って。

けれど、私は、私だけが知っている。あの事件の真相を。

あの事件の犯人は他の誰でもない私だ。私が、あの幸せな家庭を壊してしまったんだ。自分の個性がどれほど恐ろしいものなのかを知らずに使ってしまったんだ。

自分の個性は改造する能力だ。有機物だろうが無機物であろうが何であろうとも。それは自身の個性が発現した時に使い方がスツと頭の中に入ってきたのだ。

Rough、Coarse、l:l、Fine、Very Fine。

このうち一つを念じながら対象に触れば改造が始まる。それがどういった意味を持つのかは分からなかった。けれど無知な私は皆を驚かそうとまず最初に一番近くにいた父に触れ、Fine と念じた。

それが惨劇の始まりだった。父は苦しそうにのたうち回り、徐々に体が変貌していっ

た。異変に気づいた母と祖父、祖母がやってきたが、その頃には父は異形の存在へと変貌しており、祖母を——殺した。

殺した祖母を執拗なまでに切り刻み続けていた父の姿を見て、私は戻さなきやと思つた。当たり前だ、自分が仕出かした事なのだから。だからこそ、今も尚祖母であつたものに攻撃をしている父に目がけて R o u g h と念じながら手を伸ばし、反対の手を母に掴まれた。

母は私が行かないように、殺されないように掴んだのだろう。けれど、母は念じていた私に触つてしまった。

母は、悲鳴を上げてバラバラの惨殺死体へと変わった。

その悲鳴を聞いた父は首をぐるりと回し、こちらを見た。その異形な風貌になつた身体で。

そんな中でも祖父は私だけでも守り抜こうと思つたのだろうか、私の体を持ち上げ、逃げようとした。

けれど、私は父を元に戻したくて、自分が壊してしまつた幸せな家庭を戻したくて、個性をがむしやらに使つた、使つてしまつた。

結果、祖父はパーツごとに綺麗に分解され、父は更なる変貌を遂げてしまつた。絶叫を上げながら苦しみ悶える父がのたうち回り、その際に私にぶつかり、私は押し入れの

中へと転がるように入った。

そして父は絶叫を上げ、殺してくれと叫んで家の壁を壊して外へと向かった。

幸せだった家庭を自分の手で壊してしまったことが、自分が家族を殺してしまった事に耐えきれなくて私は

—— 自分自身に向けて V e r y ^改 F i n e ^造 を施した。

その結果、私は変わってしまった。肉体も精神も名も何もかもが変わったのだ。

紫^{ぜんまい}匣^{いし} 仕掛^{しかけ} という『僕』はあの日消えた。

今の『私』を表すものはSCP—914という記号のみ。

「忌々しい記憶だ。己の愚かさを再認識させられるようだ。償えきれぬ罪を魂に刻み込まれるようにな」

けれども、たったひとつだけ変わらない夢があった。

ヒーローになるという夢だけは変わらなかった、変えることが出来なかった。

だからこそ、私は今日も人を救うために人を殺すのだ。

「クソツッ！ クソオツッ！ 一体なんだって言うんだよてめえの個性は!?!」

私の個性か、そうだなこの個性はきつと——

「ぜんまい仕掛けの個性さ」

そつと優しく顔に触れる。

「じゃあな、来世では悪人にはならないことだ」
血の海がまた広がった。

C r o s s T e s t 1

朝の時間はブーツとしていることが多い。朝はヴィランの動きは比較的活発的ではない。悪事に手を染めるものは大なり小なり夜に動くものが多い。いつもであれば本を読むか、ニュースを見て次に狩るべきヴィランを定めているのだが、今日はそういうわけにはいかない。

だつて今日は彼が来る日だから。



ピンポーン、とインターホンの音が響く。来たのか、と思い座っていた椅子から立ち上がり玄関の方へと向かう。

ガチャリ、とドアを開けるとそこには筋骨隆々で金色の髪をした大男——オールマイトが笑顔を浮かべていた。

「H A H A H A ! やあ、紫~~×~~少年！」

「おはようございます、オールマイト」

「元気にしてたかい？」

「ええ、元気ですよ。オールマイト、あなたは？」

「勿論元気さ！ 君のおかげでね！」

そう言つて高らかに笑ひ、自身の左の脇腹をバシンツ、と強く叩いた。

「それは何よりです。立ち話も何ですし、どうぞ家に上がってください」

「それじゃあ失礼するよ」

そう言つて家に入ったオールマイトを居間に招待し、茶菓子と薬を持ってくる。お茶

と茶菓子を提供し、一息ついてから本題に入った。

「オールマイト、傷の具合はどうなんですか？」

「君の薬のおかげでこの通り殆ど治りかけさ」

そう言つて服を捲るとオールマイトの左脇腹にちよつとした傷があるのが分かる。

前に比べて傷が消え、あと少して完治するだろうということが分かる。

「だいぶ治癒してきましたね、体重はどこまで増えました？」

「この前測つた時は265kgかな。最近美味しいステーキハウスを見つけちゃってね

！ それで太つたのかもしれないよ」

「筋肉モリモリな人が言っても嘘にしか聞こえせんよ」

「H A H A H Aと笑うオールマイトに対し、首を横に振りながら嘆息する。

「体重の方も大分戻ってきましたね。パワーの方はどうですか？」

「んー、そうだね…。大体全盛期の8割くらいってところかな？」

「そう言っただけかめるように拳を握り締めると筋肉がはち切れんばかりに膨張する。

「相変わらずいつ見ても凄い筋肉だ。」

「なるほど、じゃあ最後に最近体に不調などはありませんか？」

「そこは全くもってNo problemさ！」

「そう言っただけで、と力こぶをつくりニッコリ笑う。」

「あと少ししたら薬も必要なくなりそうですね。はい、じゃあこれ今月分のお薬です」

「Thank you！」

オールマイトは持ってきていたポーチに薬を仕舞うとまた茶をすすりホウ、と息を吐いた。暫くはのんびりと時間が過ぎていったが、そうだったとオールマイトが言い出した。

「紫箱少年、君は進路先を決めたのかい？」

「いえ、特には…」

「なら、雄英ヒーロー科に来てみないか？ 君ならきつと良いヒーローに——」

「その申し出はありがたいのですがお断りさせていただきます」

オールマイトの言葉を遮るように否定した。だって、私が良いヒーローになんてなれるはずがない、いや、なつていいはずがないのだから。

「……………何故か聞いても?」

「私にはヒーローになる資格がありませんから」

悪人とは言え、人を躊躇いもなく殺すようなものが人々の希望となりうるものになつていいはずがない。そんなものに惹かれてしまえばロクなことにならない。それに最近少しかだけ殺すのが——いや、やめよう。これは考えてはいけない。

「そうか——」

■ □ ?? ■ □ ?? ■ □ ?? ■ □ ?? ■ □ ?? ■ □ ??

「そうか——」

ああ、やはり紫箱少年はあの日のことを忘れられていない。いや、忘れろというのは無理な話か。何せ親を祖父母を目の前で惨殺されたのだから。どれほど辛かった事だろうか。大切な家族の尊厳を徹底的に壊し、陵辱し、尊敬していたであろう父親を化物に作り替え、殺戮の限りを尽くさせるなど。

どれだけ人の人生を狂わせれば気が済むのだオール・フォー・ワン……!

紫匣少年は人と関わる事を極端に恐れている節が見える。それは大切な人を失ってしまったからという過去が原因だろう。大切なものを失う恐怖心を幼心に刻み付けられてしまった。だからこそ、大切なものを作りたくないのか人との関わりを避け、周りに対して壁を作っている。

今では私に対しては少し心を開いてくれているだろうが、それもあの出来事が無ければ彼は誰にも心を開かなかつただろう。私と彼が出会ったあの日がなければ。

?????

??*??*
??*??*

「ゴホッ、もう活動限界か……!」

人気がない裏路地でボタボタと血が落ちる音が鳴り、全身から煙が吹き出る。口から零れ落ちた血を拭き取り、壁を背に座り込む。あの日以来、昔のように体を動かす事が出来ない。それもそうだ、オールフォーワンとの戦いで重傷を負い、呼吸器官は半壊、生き長らえるために手術で胃袋も全摘した。

はつきり言つてまともに戦える体ではない。

けれど――

「私は倒れるわけにはいかんのだよ。皆を安心させるために、精神的支柱となるために私はまだ倒れるわけにはいかない」

拳を強く握り、己を奮い立たせる。私はまだ動けるのだと、人々を救い続けるのだと。目を閉じ深呼吸をした。——だからこそ、気づくのが遅れてしまった。

「オール…マイト…?」

そこには昔とある事件により関わっている少年が立っていた。

「紫☒少年…? 何故こんなところに——」

いや、それどころではない。早く、早くこの場から離れなくては。そう思うも現実是非常であった。ボフォンと音を立てて体が萎んでしまった。筋骨隆々の体はまるで骸骨のようにやせ細り、隠していた本当の姿トゥルフオームへとなってしまった

(Shiiiiit!!!)

やらかした。やらかしてしまった。見られてしまった。平和の象徴の本当の姿を。口止めをしなければ——

「いや、あのね紫☒少年——」

「やはり身体にガタがきていたのですね」

「なっ——」

なぜ、そんな思いが交錯する。紫☒少年には言っていないはずだ。私が大怪我を負っ

たということも、こんな姿に成り果てているということも何も言つてなかつたはずだ。なのに何故知っている？

「何でその事を知っているか：聞かせてもらつてもいいかい？」

「簡単なことですよ。私はオールマイトを見てましたから」

微かに微笑みながらそう言う紫×少年に驚愕と困惑を隠せなかつた。

「見ていた？」

「ええ、オールマイトが大怪我を負つてから初めて私の所に来た時に気がつきました。オールマイトは無意識かもしれませんが、時折左脇腹をまるで守ろうとするかのような妙な動きをすることがあるんです」

まあ、それもほんの些細な動きですのでたまたま気づいただけですけど——そう
呟く紫×少年にまたしても驚愕を隠せなかつた。

「たつたそれだけで私が大怪我を負つていると？」

「いえ、他にもいろいろありますよ。けれど、1番の決め手となつたのはその動作でしたね」

隠せていたと思つていた。誰にもバレないようにする自信はあつた。けれど、こうもあつさりバレてしまうとは……。

「はは……、なら君にはかつこ悪いところを見せてしまつたね」

「いいえ、かつこ悪くなどありません。あなたは為すべきことをした。人々の為に自身の命をかけて戦ったのです。それを褒めることはあれど侮蔑することなど以ての外です」

「そうか、そう言ってもらえると助かるよ」

「——けれどオールマイト。あなたは頑張りすぎています」

唐突にそう言った紫箱少年の言葉に疑問を抱いた。

「頑張りすぎている？ 私が？」

「オールマイト、あなたは大怪我をしているはずですよ。しかし貴方はそれでもなお人々の為に尽くしています。……それはきつと尊いことなのでしょう。けれど、無茶を通せばいずれ己に返ってきますよ」

「けれど私は平和の象徴。私が休めばきつとヴィラン達は安寧な日々を壊してしまう。だから——」

「オールマイト、他のヒーロー達が信じられませんか？」

声が詰まった。

信じてる、信じていないわけがない、信じているはずだ…。

「他のヒーロー達も日々ヴィランを取り締まり、人々の安全を維持しています。貴方が休んだとしてもきつと貴方の後に続く人達がフォローしてくれます。だから、他のヒー

ローを……いや——」

「——人に頼ってください」

「オールマイト、あなたもヒーローである前に人間なんです。頼ったっていいんです。辛いのであれば休んでもいいんです。あなたが築き上げたものはあなたが思っているよりも強い。それに、顔色の悪いヒーローを見て安心できる人なんていませんよ。ですから、休んでください」

何故だろうか、紫×少年の言葉がすんなりと心に入ってくる。こちらを労る優しさを孕む声が酷く心地いい。

人に頼る、か。お師匠が死んでから私は極端に人に頼ることが減った。なぜなら私は平和の象徴。私が率先して人に頼られねばならない。

そこまで考えてようやく気がついた。

——ああ、そうか。だから、人に頼ろうとは思わなくなったのか…。

「ハハツ…、まさか君のような中学生に論されるなんてね。私も随分と焼きが回ってしまつた。そうだね、君の言う通りだ。私とて人間、休みは必要か。だから、私も頼るとしようか」

「そうです、それでいいんです」

ホツとしたように笑みを浮かべる紫×少年。

「けれどー！」

「——それでも私は平和の象徴。人々を安心させるのが私の仕事なのさ」

はあつ、と嘆息する紫☒少年の姿に少しかけ申し訳なく思うもこればかりは変えられない。

「強情な…。けれどまあ、いいです。あなたがそう言うのは分かっていますから。ですから、これを受け取ってください」

そう言つてなにやら袋を渡してくる。それを受け取り中を漁ってみると赤の錠剤と青の錠剤が1粒ずつ入っていた。

「それは特殊な錠剤です。青の錠剤は一時的に痛覚をシャットダウンします。そして赤の錠剤ですが、これは回復促進剤です。あなたの怪我も7割ほどまでならこれで治すことができます。ですが、副作用としてシヨック死するレベルの激痛が襲ってきます。ですので、必ず青の錠剤を飲んでから赤の錠剤を飲むようにしてください」

怪我が治る…？　いくら手術しても治らなかつた私の傷が？

「本当に、本当に治るのか？」

藁にもすがる思いでそう聞くと無言で頷いた。

震える手で青の錠剤を摘み上げ飲み込む。

「飲んだのなら一度自身を抓つて見てください。痛みが無ければそのまま赤の錠剤を飲

んでください」

そう言われたので自身の腕を抓ってみる。

——痛みは、ない。

そして赤の錠剤を手に取り飲み込む。

瞬間、傷跡から激痛が走った。

「グウツ、オオオオオオオオ!」

「——」

紫×少年が何かを言っているが、あまりの激痛で聞き取ることが出来ない。傷跡に焼き鏝を押し付けられているかのような激痛と熱が迸る。身体から大量の汗が吹き出て地面に水溜まりを作っていた。

そうして、一体どれほどの時が経ったのだろうか。悠久にも思える時間が過ぎ、ようやく身体の痛みが消えうせた。痛みで火照った身体を冷ますように大きく深呼吸を繰り返していることに気がついた。

——息苦しくない。

いつもであれば吐血する様な出来事が起きていたのに吐血しない。というよりも、なんだか身体が動かしやすくなっている気がする。これは、もしや本当に——

「お疲れ様です、オールマイト」

「私は、貴方のように人を導く存在ではないし、人に優しくできません。だから、駄目なんです。ヒーローだけはなったらいけないと思うんです」

「違う、違うぞ紫田少年。君は十分ヒーローになる資質を持っている。あの時、私を救ってくれたではないか」

あの日、あの路地裏で受けた恩を私は決して忘れることはないだろう。そして今も君に助けられているのだ。だからこそ私は今もヒーロー活動に専念できているし、皆を助けることが出来る。

だから――

「君にヒーローになる資格がないだなんて誰にも言わせはせんさ。胸を張っていい、君はきっと良いヒーローになれる」

そう伝えると酷く動揺したようで、自身の手を弄っている。心を落ち着けようとしているのだろうか。しかし、これで分かった。

やはり紫田少年はヒーローになりたいと心の内で思っている。けれど、過去の事件のせいで自分がヒーローになつたとしてもまた人を巻き込んでしまうのではないかと思つて、一步踏み出せないのだ。

ならばこそ、私がその一步を後押ししよう。

彼がヒーローになりたいと言うのであれば全力でサポートしようじゃないか。彼か

ら受けた恩を返す為にも。

「紫☒少年、雄英ヒーロー科に来てみないか？ きつと君なら最高のヒーローになれる
や」

そう言つて紫☒少年に向けて手を伸ばす。

紫☒少年は深く悩んだ後、此方をジツと見つめて――